



Title	外国語教育棟（センター）について
Author(s)	大平, 具彦
Citation	高等教育ジャーナル, 1, 26-27
Issue Date	1996
DOI	10.14943/J.HighEdu.1.26
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/29873
Type	bulletin (article)
File Information	1_P26-27.pdf



[Instructions for use](#)

外国語教育棟(センター)について

言語文化部教授 大平 具彦

今後の学部一貫教育の展開にあたって、外国語教育には専用の教育棟が必要であり、それは、全学共通教育の面からみて、情報処理教育、理科実験教育、健康体育教育等のそれぞれの教育棟とセットにした形で、同じゾーンにあるのが望ましいという観点から、簡単にご報告いたします。

先ず、現状の設備ですが、これは極めて貧弱であると言わざるを得ません。対象学生は1,2年生合わせて5000人もいるのに対し、通常のラボ機能を備えただけのLL(ランゲージ・ラボラトリー)教室が4室270席(旧教養部校舎に1室、言語文化部校舎に3室)あるに過ぎず、視聴覚施設は絶対的な不足状況です。勢い教官は昔ながらのスタイルで、各自がテープレコーダーを教室に持ち込むこととなります。LL教室の設備は大分前のもので老朽化も進んでいます。視聴覚教育関連の職員は事務官、技官それぞれ1名ずつで苦しく、以前から増員を要求しているのですが実現しておりません。

今後の外国語教育を展開してゆく上で、もちろん教師と学生との実際のコミュニケーションが授業の基本ではありますが、教官定員の面からも新しい教授法の面からも、視聴覚機器を活用した教育法が重要となってくるのは明らかです。そこで新しいステップとして、平成8年度概算要求に、ラボ機能を拡大した、市販語学ソフト(CD-ROM)に対応できる機器設備(60ブース×6教室)、および事務官1、技官2の要求を出しました。(しかし残念ながらこれは今年度は見送りとなった。)

言語文化部では、これからの外国語教育をどのようにしてゆくか、現在、特別委員会で検討を重ねています。これまで外国語教育の改善

について様々に議論がなされてきましたが、今回こそいよいよ根幹からの改革へと踏み出さねばならないと考えております。そのためには教授法の改革だけでなく、制度面、カリキュラム面の改革の中にしかるべく位置づけられていなければなりません。それらが具体化されるためには、やはり外国語教育棟の建設が是非とも必要です。

以下、この外国語教育棟について要望したい点を挙げます。

- (1)その外国語教育棟には多機能教育設備が備えられているのが望ましいこと。(当座は市販の語学教育ソフトからスタートするにしても、将来は部局独自の教材開発を進めたい。)
- (2)その場合、多機能教育設備は情報処理教育設備とセットにし、外国語教育棟と情報教育棟とは一体化しているのが望ましいこと。
- (3)多機能教育設備はメンテナンスが極めて重要であり、そのための保守要員も情報教育とセットにして是非とも確保して欲しいこと。
- (4)外国語教育棟の建設場所は、外国語教育が全学生に関わるものであるため、中央ゾーンであるべきこと。

討論

総長: 来年度概算要求の申請の時期は11月なので、それまでに案をまとめる必要があります。報告にあったような方向に踏み出すとすれば、外国語教育、情報教育、理科実験教育、健康体育教育の各部門間で調整をしなければなりません。そのためには言語文化部で、今後どのような外国語教育をやってゆこうとするのか、カリキュラム、教育法、機器の使用等について、基本的スタンスを

先ず固めねばなりません。その作業に、積極的に、早急に取り組んで欲しいと思います。

大平: まさにその通りで、こうした研究会で全学的レベルでの議論も始まったことですし、言語文化部でもその必要性は強く認識していますので、11月までかはともかくとして、近々、その体制づくりはなされることと思います。例えば、機器の使用は外国語教育にどのように組み込まれるべきなのか。外国語教育にはやはり少人数教育が最も効果的であり、機器の使用も万能ではなく、それはあくまでも教育システム全体の中に位置づけられるべきですね。そうした議論をひとつひとつ積み重ねていって、全体的構想を作らねばなりません。

A: 言語文化部は、例えば情報教育とセットで「コミュニケーション学部」をつくるなど、学部として独立してみてもどうですか。外国語教育を行なうだけでなく、自分たちの後継者を育成する必要もあるわけですし。多機能、マルチメディアを標榜しても、それを使いこなせる教官が育たないと困るのではないですか。

大平: この研究会で、そうした組織変更を含む議

論にまで進んでよければ、色々とはあるのですが。言語文化部としても学部化には関心を持っています。ただ全学教育とどう兼ね合わせるかという問題があります。

総長: 全学教育の問題はあるにしても、要は言語文化部が自らの将来像をどう描くかということではないですか。学部化でも大学院でも色々知恵をしばって具体的方法を考え出すべきです。将来性のあるものであれば実現をめざしたいと思いますし。もちろん関連する学部や部局がお互い満足ゆくものでなければなりません。

B: 文学部は外国語とつながりが強いので、この問題については今後率直に議論してもよいと思っています。

C: 今後の全学教育で、情報教育と共に、リベラル・アーツの中核として外国語教育が重要であることは、疑問の余地のないところです。

大平: その意味でも、外国語教育棟は大学の中心ゾーンに位置しているべきです。

総長: 今後、大学は北18条以北に順次拡張してゆく予定です。そうすると、今の言語文化部、旧教養部あたりが大学の中心ゾーンになります。